

遠隔授業における「場の共有」 コロナ禍における実技授業「後帯機による手織物」

“Sharing Place” in Distance Education Practical Lesson Related to Covid-19 “Back Strap Loom”

秋元 弦*・富田 晃**
Yuzuru AKIMOTO*・Akira TOMITA**

要 旨

本稿は、遠隔授業としておこなった大学における美術系の実技授業「後帯機による手織物」について紹介・考察するものである。2020年、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、多くの大学で遠隔授業への切り替えがおこなわれた。「小学校図画工作演習」では、「後帯機による手織物」の実技授業を、オンライン上のテレビ会議システムを使って行った。結果としては、全員が作品を完成させることができたものの、遠隔による「場の共有」の困難さから不安を感じた学生が少なくなかった。実技科目における「場の共有」の大切さを再認識するとともに、遠隔授業において、いかに「場の共有」を実現するのかという課題が見えてきた。

キーワード：場の共有 遠隔授業 実技科目 オリジナル教材 手作り

1. 実技科目における遠隔授業実施の経緯

2020年、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大に伴い、多くの大学では、従来の対面授業を停止して、インターネットを利用した遠隔授業への切り替えが行われた。それまで、大学における遠隔授業は、放送大学やJMOOCにおいて、教養的内容においてはそれなりに普及していたが、理工系、芸術系、体育系の実習、実験、実技をとまなう科目は、遠隔授業が行われることはあまりなかった。しかし、2020年度の授業開始が近づくとともに、人と人との接触の回避が感染症の拡大防止のために求められるようになり、各大学は、これまで遠隔授業があまりおこなわれてこなかった実習、実験、実技も含めて、インターネットを利用するなどした遠隔授業への対応が求められた。

わが国において、実技における遠隔教育が、これまでまったくおこなわれてこなかったわけではない。NHKは、古く1959年に自動車運転やテレビ修理と

いった職業訓練的なテレビ番組を開始し、現在では、手芸、写真、絵画など趣味的な内容の講座番組を放送しているとともに、1960年から現在まで小学生向けの造形番組を放送している。また、民間ベースでは、ペン習字や各種手芸などの通信教育も発達している。本稿が扱う、単位認定をとまなう美術系科目の大学教育では、武蔵野美術大学や京都芸術大学に通信制の教育課程がつくられている。ただし、こうした美術系大学の通信教育課程は、週末のスクーリングにおいて技法の伝達や作品の講評をおこないつつ、平日に各自の自宅で制作をおこなうというものであり、まったくの遠隔授業ではない。

2020年のコロナ禍において、各大学では、3月半ば頃から、新年度における授業に関する通知を出すようになった。東京大学では、まず、3月18日に、新年度における遠隔授業化の推進を掲げ、31日には、遠隔授業のみの開講に引き上げ、4月はじめには、学生、教員ともに学内への入構を制限した。文部科学省は、3

* 元弘前市中学校教諭
Former Junior High School Teacher in Hirosaki City

** 弘前大学教育学部美術教育講座
Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

月24日付けで遠隔授業の活用を推進する通知を出した。そして4月はじめには、国家の免許制度に直接かわる医療実習や教育実習に関する実施時期の延期や代替方法についての通知を出した。一方、国家制度に直接かわらない実技等についての通知は、5月になってようやく「美術、音楽や体育関係の分野等、遠隔授業の実施によっては面接授業に相当する教育効果を認めることが困難な授業科目が多く開設されているような学部等においては、学生の状況や希望等も踏まえ、こうした修学上の様々な配慮や工夫について検討を行うようお願いいたします」と、なんともあいまいな通知を出した。

こうしたなか筆者が所属する弘前大学では、全学の対応として、授業開始の延期が、3月30日付けで4月23日に、4月17日付けで5月11日に再延長された。教養教育については4月14日付けで、前期は遠隔授業のみとする通知が出された。筆者は、担当する教養科目の実技授業の実施時期を夏季集中や後期に開講時期を変更した。そして、4月22日付けで、大学のすべての前期の授業を遠隔授業とする通知が出された。この通知をうけ、免許法とのからみにより授業時期の変更が難しい教育学部では、実技などの授業においても、実施時期をできるだけ後にずらさないことが求められた。

こうして、富田が担当する「小学校図画工作演習」も、数週間の準備期間ののちに遠隔授業を実施することになった。本学教育学部の小学校教員養成課程3年の選択必修科目である。これまで、二人の教員が担当し、筆者が木工を、もう一人が紙細工をおこなっていた。ノミやノコギリなどの刃物を扱う木工は、遠隔授業でおこなうには危険があり断念した。

2. 後帯機による手織物

青森の縄文遺跡、三内丸山から草や蔦を織ったポシェットが発見されている。このように、織る、編むという行為は、人類のモノづくりの一つの原点といえよう。人類は、環境にある植物の繊維や動物の毛から糸を紡ぎ、布を織ってきた。繊維の種類は各地域などにより多様だが、布を作る装置「機（はた）」の基本は共通している。人間は、布を身に纏うことによって、暑さ寒さから身を守るとともに、我が身を飾ることを楽しんできた。日本では、手織物というと、鶴の恩返しのような立派な箱型の織機がイメージされることが多い。こうした箱型の織機が開発されたのは安土

桃山時代あたりのことで、それまでは「いざり機（いざりばた）」「腰機（こしばた）」「後帯機（こうたいき）」などとよばれる、簡素な仕掛けで布が織られていた。中米のグアテマラ、南米ペルー、中国や東南アジアの山間部では、現在も、こうした後帯機の文化が引き継がれている。18世紀末、外部動力を用いた力織機による大量生産がはじまり産業革命が興った。機械の「機」の訓読みは「ハタ」である。トヨタやスズキといった自動車会社は、織機製作にルーツがある。

本授業は、手づくりとともに機械のルーツでもある「機（はた）」に着目し、身近な物を使って後帯機をつくり、それで手織りをするものである。教員たちが開発したオリジナルの教材キットを用いて、「巻き結び」などの基本技法を身に着けながら後帯機を組み立てる。そして、糸の選び方、織り目の変化、古着を使った裂き織りなど、各自の工夫をもちこんで、世の中に一つだけの布を織り上げるものである。

3. 後帯機との出会い

秋元が後帯機の織物に関心をもつようになったのは、2015年に「弘前大学グローバル人材育成事業：学生市民等協働プログラム」における「スペイン語圏世界との手工芸・観光・言語学習を通じた文化振興と産業育成 ～メキシコ国オアハカ市での研修を通じて～」(代表：富田晃)に市民の立場で参加し、メキシコ国オアハカ地方を訪問したのがきっかけである。

メキシコ国の南部にあるオアハカ盆地は、アメリカ大陸で最初の文明が発祥し、サポテコ人やミステコ人による古代国家が繁栄したところである。オアハカ市と郊外の諸集落と連携した交易のネットワークが古代から発達しており、一村一品的な地場産業が定着している。2015年にオアハカを訪問した際には、テトティトゥラン村の毛織物、アラソラ村の動物木彫り、ハリエツァ村の後帯機による手織物、コヨテベック村の黒い陶器、タマルテベック村のチーズ工房といった様々な地場産業の現場を訪問し、それぞれの手工芸品や食材がつくられる現場を見学した。筆者は、ハリエツァ村の手織物の写真記録を担当した。市場の軒先に女性たちが座って談笑しながら後帯機による手織物をしていた。器用に織り上げられていく作業もさることながら、素朴ながらも理にかなった織機の仕掛けに興味をもった。帰国後、オアハカ訪問のレポートを作成したり、メンバーたちと弘前大学の学校祭や市内の展示場で、報告会を開いたりするうちに、手織物の

仕掛けを再現して、教育用の教材をつくってみたいという思いが湧いてきた。また、手織物の教材化には、筆者が中学校教諭として理科の教材化や「総合的な学習の時間」に関わってきた経験が生かせるものと感じた。

織物は、衣服、袋、カゴなど人間の生活に欠くことのできないものとして新石器の時代から今日まで使われている。人類初期の織物・編み物は道具をつかわずに材料を編み込むことによってつくられていた。紀元前数千年になると、世界のあちこちで、腰からまわした棒に縦糸を結びつける後帯機が誕生した。後帯機はヨーロッパ、アジア、中南米など世界各地にその伝統や痕跡が残っている。かつては人間のだれしもがこうした簡単な機と身近な繊維で布を織ったのだろう。比較的単純な織機である後帯機を試作してゆくうちに、教材としての下記の利点が見えてきた。

- ・構造がシンプルで、その仕掛けが理解しやすいこと。
- ・体と織機が一体になり身体感覚をもって、いにしえの人々に思いを寄せることができること。
- ・人類の原初的な知恵と、機械化、量産化による近代文明との関係を考えるきっかけになること。
- ・糸の材質、色や織り方の工夫によって、作品に個性を表せること。

4. オリジナル教材キット「シエントス」

筆者が、自ら開発した手織物の教材を用いて弘前大学の授業にかかわるようになったのは、メキシコ訪問の翌年2016年からである。2016年度、弘前大学の教養教育において全学の2年生（一部1年生）を対象にした必修科目「学部越境型地域志向科目」が開設された。そして「学部越境型地域志向科目」の選択肢の一つとして富田が「地域プロジェクト演習：地域産品の創造」を立ち上げた。手でものを作るという、人間の根源的な営みを通じて、先人の知恵や文化の伝達を考えるというプログラムであり、内容は、前半が「藁細工」、後半が「手織物」である。前半の「藁細工」の授業については野崎克行・富田晃「地域文化と造形教育：稲藁を素材としたもの作りの授業」『弘前大学教育学部紀要』123,2020に紹介されている。秋元が後半の「手織物」を担当した。

上糸と下糸を交互に動かす仕組みを「綜統（そうこう）」という。綜統を実現する部品を本稿では「開

口器」と呼ぶことにする。開口器は縦糸を上下に分けて、横糸を通す道を作る織機の最も重要な部品である。仕組みとしては大きく分けて糸による方法（糸綜統）と、板状のもの（板綜統）に大別される。アイヌも含めて日本の後帯機では、両方の方式があったようである。試作にあたり、初めはメキシコで見たように竹箸の中心に穴を開けてそれらを枠に固定してみたが、あまりに手間がかかり教材キットにはふさわしくないものと判断した。インターネットを調べるとニュージーランド製の手織物のキットが販売されていたが1万円ほどと高額であった。開口器を手軽かつ安価に作れる方法をさまざまに試行錯誤するうちに、百円ショップで販売されている溝付きのプラスチック容器を切断、改造して用いることによって、安く簡単に開口器をつくれることがわかった。教材に私的な思いを込めて、キットの名称を「シエントス」とした。「シエン」はスペイン語の「百」であり「シエントス」はその複数形である。キット作成で世話になった材料の入手先を表している。毎年、改良を重ね現在は「シエントスⅣ」を用いている。

一点一点が違う手作りの良さを大切にする教材のキットが、百円ショップの化学製品を解体して作られるというのは皮肉のようでもあるが、元来は個別に成立していた技術と文化が、教材開発という場で出会い、融合することに、なんとも、不思議な感慨を得た。手近にあるさまざまなものを組み合わせてなにかを作ることを「ブリコラージュ」という。フランスの文化人類学者のレヴィ＝ストロースが、人間がもつ原初の力「野生の思考」として紹介したものである。異なるものが融合して新たな創造が生まれるブリコラージュの素晴らしさを、学生に感じ取って欲しいと思った。今回使用する「シエントスⅣ」の板状の開口器によく似たものが青森県や新潟県の縄文遺跡で発見されている。どちらも植物の繊維を荒く織る用途に用いられていたようである。開口器を用いた織りは、縄文の時代から青森に根差していたのである。

5. 手織物の遠隔授業にあたって

2020年度が始まろうとする頃、新型コロナウイルスの感染が全国的に拡大し、弘前大学では全ての授業が遠隔でおこなわれることになった。システムとしては、弘前大学ではリアルタイムでのビデオ会議に適した Teams、もしくはオンデマンド授業に適した Moodle を使用することになった。「小学校図画工作演

習」で富田が従来おこなっていた木工は刃物を扱うため危険度が高く遠隔授業には向かなかった。そこで、以前から教養教育でおこなっていた手織物ならば危険度が少なく遠隔授業が可能ではないかと、富田と秋元で検討した。主な話題は以下であった。

- ・手織物の準備段階は複雑ではあるが、段階を分けて画像をやりとりすれば遠隔でも指導が可能だと思われる。
- ・遠隔という制限からこの教材を眺めると、学習者の手元にキットがあることが授業を成立させる手がかかりになる。
- ・教員による手作りの制作キットを用いることにより、学生が「授業をつくる」という教師側の努力や工夫に気づくことができる。
- ・この授業をきっかけに学生が自ら教材を開発できる教師になってほしい。

6. 学習指導要領との関連

小学校「学習指導要領」（平成29年告示）では図画工作科の目標を次のように定めている。

表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。
- (2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
- (3) つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。

オリジナル手織物制作キット「シエントス」をもちいた制作活動では、表現と鑑賞を体験し、言語活動を通して交流する。また、制限の中にあるデザイン性を探り、先人の知恵や文化に触れる。これらのことから主体的で対話的な深い学びを体験する機会となる。また小学校教育において、情報を再構築して新たな価値

につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができること、こうした資質の形成が期待できる。本教材が、図画工作科に適合した教材であるとともに、さらに、小学校教員の養成にふさわしいものであることを確認することができた。学校は教科横断的な視点で教育課程を俯瞰し改善していくカリキュラム・マネジメントを進めていく必要がある。学生たちがそれを担う一員として現場に立つ日は遠くない。その際に今回の体験が役立つことを祈る。

7. 準備

(1) 手織物制作キットの作成

オリジナルの手織物制作キット「シエントスⅣ」を受講者人数分（32人＋α）作成した。

(2) 動画・画像の撮影

数名のボランティアの方々のご協力を得て、教材の紹介と学生の自学用に制作上重要な技術についての動画・画像を収録した。これらはネット上に置き、学生の必要に応じて閲覧できるようにした。

(3) 指導計画

本授業を①～⑦の7コマ（1コマ90分）で構成し、Teamsでのリアルタイムを基本とした。また、授業後でも、参考資料（動画・画像）をみたり、授業自体を再視聴したりすることによって、授業時間ではうまくできなかった学生も次週までに挽回できるようにした。

第1時間目（5／13）イントロダクション

- ・あいさつ
- ・実作業のデモ映像の視聴
- ・中米グアテマラで民族衣装を織る母娘のドキュメンタリー番組の視聴
- ・巻き結びに関する講義

第2時間目（5／20）

- ・キットの内容確認
- ・巻き結びを使って縦糸を整える

第3時間目（5／27）

縦糸を開口器に通して張り、最初の横糸を通す

第4時間目（6／3）

制作。階段模様の作り方

第5時間目（6／10）

制作。横糸二本取り、裂き織りなどの工夫の紹介

第6時間目（6／13）

自由制作

第7時間目（6／17）

発表。学生一人一人の作品の説明とそれに対するフィードバック

第8時間目（8／7）

授業計画時には予定していなかったが、後日、対面授業の実施が認められたことにより大学の教室に集まっの講評会をおこなった。

8. 授業の実際

（1）遠隔授業のシステム

Microsoft Teams を使う。美術室に指導者用のパソコンを置き、附属カメラでモニター役の学生が作業の様子を映しながら進めた。また、日替わりで3名の学生にカメラとマイクをオンにしてもらい Teams の画面に出てもらった。これは反応を知るためにとても役に立った。質問があったりうまくいかなかったりしたときには、カメラとマイクをオンにして話しかけて貰った。

（2）確認の「挙手」

「巻き結び」は、海、登山、レスキューの場面でも使われている実用的な結びの技術であるが、多少、作業が複雑なこともありいつも指導に苦労する。単純な構造なのだが、簡単にはできるようにならない。今回の授業では、紙の解説書、素材動画などでも確認できるようにして、カメラの前でモニター役の学生さんにつまづいてもらいながら時間をかけて指導した。「できた人は手を挙げて」と声をかけて、Teams 上で「挙手」のボタンを求めると、しばらくして全員の「挙手」がそろった。ところが実際に進めていくと、「巻き結び」が習得できてなくて先に進めなくなった学生が数名いた。あとで聞くと「自分一人のために授業を止めちゃ行けないと思った」ということであった。期間巡視で確認できず、自己申告に頼る遠隔授業の弱点が見えた。

（3）鑑賞

最後に学生の作品を一人一人見せて貰い、互いに鑑賞した。それぞれの作品について富田と秋元がコメントした。狭い環境のなか工夫してキットを設営していた人がいた。全員が最終回までに完成できた。

9. 学生の感想

第7回の Teams 上での作品鑑賞会の後、「手織り物の授業であなたが学んだことを1,200字程度にしてください」というレポートを課題にした。以下、興味あるコメントを抜粋して紹介する。

①今回、初めてオンラインで手織物をやった。初めは難しくてできるか不安だったけど、やっていくうちにコツをつかんで、できるようになり、楽しく作業することができた。また、自由制作のときは、色合いをきれいなものにしたかったので、何かいいものがないか家の中の毛糸を探してみた。そして、どの色合いにしたらきれいか、選ぶ時間も楽しかった。また、最後の発表の時、みんなの作品にそれぞれの個性が出ていたり、私には思いつかなかったアイデアで工夫していたりと、とても面白かった。

②手織物のような手作りの物は、機械で作るものに比べるとはるかに時間がかかり大変だが、機械で作った時には得ることができない達成感や充実感が得られると思った。また、世界で自分だけの一つの物を作れるという点も素晴らしいなと思った。やっている時に、マス目を一つ飛ばしてしまっでどうしようと不安に思ったが、後でそれも模様になると知り、失敗を生かせるというのも手作りの良さだと思った。作っている時は、うまくできなかったところがあつて落ち込んだが、最後にできたものを見てみると、それを自分で作ったのだと思うとうれしくなつて、お気に入りの作品になった。

③オンラインの授業という点に関しては、今回の授業で向いていることと、向いていないこと、また、メリットとデメリットがあるように感じた。ある程度やり方が分かってからはオンラインでも問題がないように感じたが、やはり最初の基本的なことは不便なことが多いように思った。また私は、オンラインだとすべて一人でやらなければいけないということにもとても不安を感じた。いつもなら友達と教え

あったり、助け合ったりできるが、オンラインだとそうすることが難しい。友達と電話などで話すことはできても、実際に手を使って手伝ってもらうことはできないため、そういう点の不便は大きかったように感じた。

④手織物の授業を通して、手作りの活動を授業で行うことの重要性について学んだ。「手作り」の活動は、方法はやり方が決まっているが、使うものの素材や色、工夫の仕方は決まっていなかったため作る本人の感性に委ねられている。そのため、「手作り」の活動は児童が個性を発揮できる活動である。また、どのような作品を作りたいかを創造し目標を立て、どのような方法を行うことでその目標を達成できるか主体的に考える、そのような態度の育成にもつながるため、児童自身の造形的な見方・考え方を深め感性を育むよい機会となる。そのため、このような特性を持つ「手作り」の活動は児童にとって効果的な活動となると学んだ。

⑤授業を行う際には必ず「見せあう」機会を設けることが必要になる。手作りによってつくられる作品は作る人1人1人の感性や個性に影響を受けるため、完成形がすべて違うものとなる。そのため「見せあう」機会を与え、共有化する場を設けることで、他者の作品から新たな知識や工夫の方法を学ぶことができる。そのため、自身の見方・感じ方を発展させることが可能となるとともに、新しい発見を生み出すことを可能とする。そのため授業の中でこの機会を設けることは重要である。

⑥オンラインでの個人での活動が中心になる授業には不安要素が多くあった。自分の作業方法は間違っていないか疑問をもったり、説明を聞いても分からない作業があったりと自身の作業に自信が持てず、不安であった。このような不安は、児童も感じるであろう。その際に他者と共有することができれば、その不安はなくなるであろう。先生には聞きづらいと感じたり、自分だけが分からなかったときに先生に聞くことで授業の流れを止めてしまわないかと危惧したり、全体の中で声を上げることに苦手意識を感じる児童にとって、他者との交流・共有の場を設けることが効果であろう。さらにこのような機会を設けることは児童一人一人にあった支援を行う上でもよい手段となる。そのため、図工の授業を行う際に

は、他者と交流・共有する機会を積極的に設けることが大切であると学んだ。

⑦今回の教材のように身近なものを使った活動を行うことが大切であると学んだ。私は織物のことは知らなかったが、使うものは毛糸や糸、木の棒やパッチンなど日常生活の中でよく見て使うものだった。このように身近な物を用いてもものを作るという活動を行うことは、新しい視点に繋がる。そして、物事を見る態度や造形的な資質・能力を養うとともに、児童の身近な物への造形的興味関心を持たせることになる。そのために、教材に何を使うか、教師側の工夫が大切であると、今回の授業をとおして学んだ。

⑧録画を何度も見直すことで、次の時間までには追いつくことができた。

⑨わからないことを他者と共有できないということでイライラしてしまうことが何度もあった。

⑩オンラインでは、自分だけがわからないのではないかという気持ちになってしまい、質問することのハードルになった。

⑪わからないところを友人とラインで確認し合いながら進めた。

⑫織物は、あきらめなければ成果を得ることができるあたたかいものだということがわかった。

⑬巻き結びは、慣れない糸の回し方とカメラの向きで頭の中がこんがらがってしまった。

⑭目の前で見るのとビデオ画面で見るのとは全く違い、工夫する必要があると感じた。

⑮きっちりときれいに仕上げるのが大事だと思って取り組んだが、他の学生の作品を見てバラバラなのに驚いた。

⑯私は授業を通して、困難を他の人と共有したり、一緒に頑張っけて乗り切ったりという関わりを重視していたことが分かった。

10. 考察

上記の学生のコメントをもとに授業成果を考察する。

＜造形遊びと教材化＞ ① ② ④ ⑦ ⑫

学生の感想からは、造形あそびとして、楽しんでもらえた様子が伝わってくる。なお、自分で指導することを想定して書いている学生が多かった。教材化についても児童の個性を発揮する場ととらえている学生がいることに教員養成の授業の成果として心強く感じる。

＜結びという技術、学習と模倣＞ ⑧ ⑬ ⑭

巻き結びはハードルが高かったようである。感想ではカメラワークや解像度などの不備や不満を述べているものが多いが、筆者はそうした技術的な問題だけで解決できるとは考えていない。紐を棒に巻き付けるといって簡単に見える操作であるが、見ただけでなく自ら身体感覚を通して体感しなければ身につかない。こういった種類の学習をしたことがなく、視覚情報に偏った捉え方をしているのは、対面で指導してもなかなかできないものである。

こうした結びを学ぶには学習者が指導者の近くにいて、指導者の指先の動きと紐の軌跡を自分の指で順を追って模倣する必要がある。グアテマラやメキシコの人たちが、何人かあつまって手織物しているのは、「場を共有」することにより技術が伝承されるからなのだろう。

われわれの脳は模倣を伴う学習を行うときには自分になにかできる領域、身体近傍空間で行うという。ところがサルを使った実験では、物理的に距離が近くても間に透明な仕切りがあるときには、自分の行動が向こう側に及ばないので、目の前で起きることを身体近傍空間でのできごとと認識しない。そこで学習が成立しにくくなるという。

このことを今回の遠隔授業にあてはめて考えると、カメラの向こうで指導者が見せている行動は、透明なついたての向こうで起きている出来事と同様に、学習者が身体近傍空間でのできごととして認識していない可能性がある。目の前に大映しされていたとしても模倣は難しく、その理由を学習者は言えない。

「学習者は他者の行動を理解することと、自分が他者の行動にどう反応すべきかを両方同時に行っている」という視点で遠隔授業の在り方、特に交流の仕方

を見直す必要を感じる。

＜わからないときの気持ち、他者との交流・共有＞

⑤ ⑥ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑮

「自分だけがわからないのではないか」という不安を感じた学生が多かった。そうした時、学生たちは授業後に SNS などをつかって教え合っていたようである。このことは大学生だからできたことであり、小学生を対象にした場合は無理であろう。

＜遠隔授業での戸惑いと気づき＞

③ ⑨ ⑩ ⑫ ⑮ ⑯

遠隔授業でのとまどいや気づきについての記述が多かった。他人と共有できないということや自分だけを取り残されているのではという孤立感を述べている学生が多い。この点こそが遠隔授業の難しさだと感じる。特に小中学校での遠隔授業では、不安を感じていてもそれを的確に表現して教師に訴えたり、仲間同士で解決したりすることは難しい。

また⑯の学生は、いままでの様々な授業を振り返って「共有」と「関わり」について気づきを書いている。この点は、教員養成の授業を考える上で、とても重要なことであると思う。

11. おわりに

突然の遠隔授業に対して急場を凌ぐことはできたと思う。今回の経験を通じて、実技系の授業における「場の共有」の大切さをあらためて認識した。その点、学習者の手元に手織物のキットのような操作できる具体物があるということは、授業者側にも学習者側にも手がかりがあるように思う。そして、カメラを通して伝える工夫、学習者ができるようになったことを確認する方法などを工夫するとともに、互いに見比べたり教え合ったりする「場の共有」をどうやって実現するかが、実技における遠隔授業の成否につながるということがわかった。

授業は生中継の緊張感の中、モニター役の学生のたおやかな反応や富田先生の臨機応変なライブ感覚に助けられた。学生に「最近どう？」と聞くと、「遠隔授業が多くなって、提出するレポートが増えてたいへんです」という。情報だけがやり取りされていくと息がつまりそうになる気分になるのだろう。今回の授業は、たとえ遠隔であっても、体全体で素材とかかわるリアルな体験になっていたことだろう。

<参考文献>

- 野崎克行・富田晃「地域文化と造形教育：稲藁を素材
としたもの作りの授業」『弘前大学教育学部紀要』
123,2020
吉本忍『世界の織機と織物』国立民族学博物館,2013

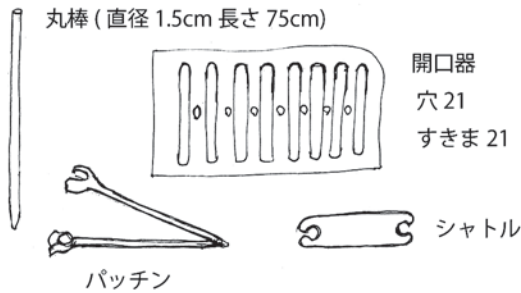
(2020. 8.17 受理)

Cientos IV 後帯機で織る

Back strap loom

1. 準備・材料

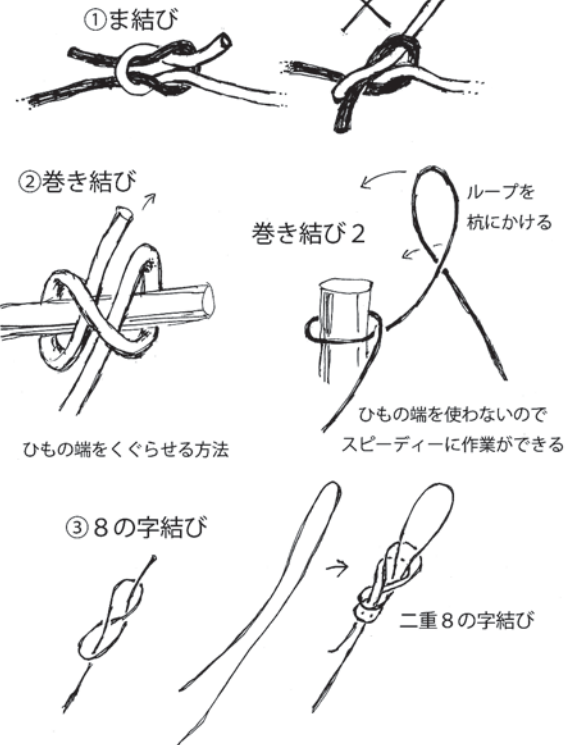
①キットの内容



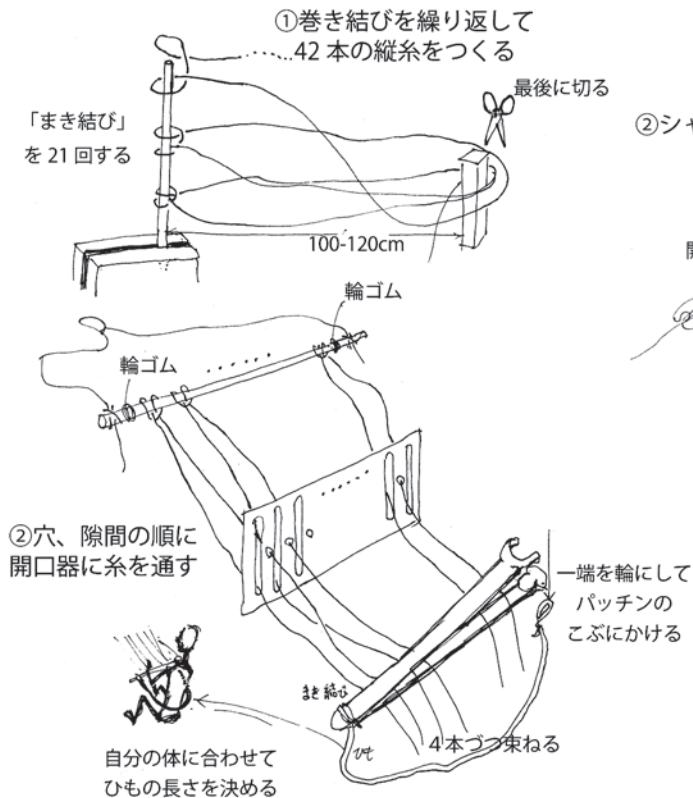
②他の材料・道具



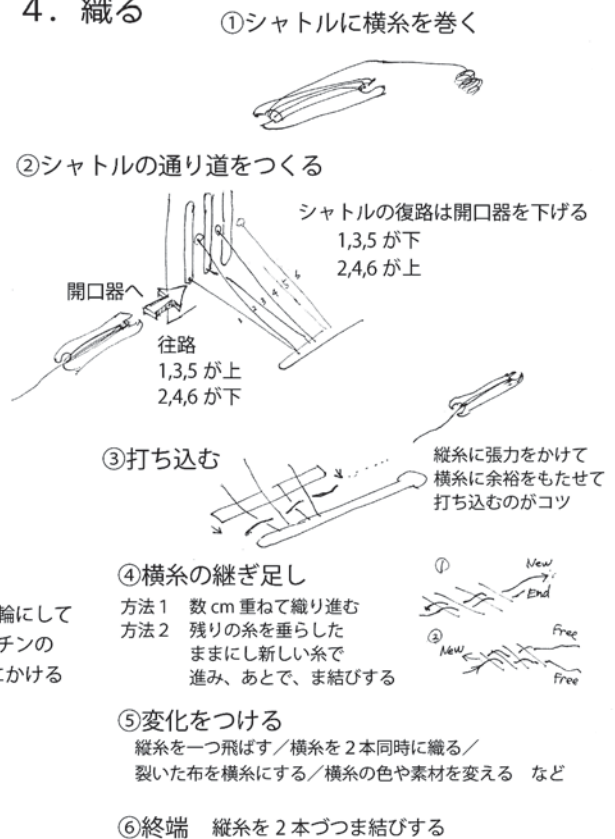
2. 結び方



3. 縦糸を整える

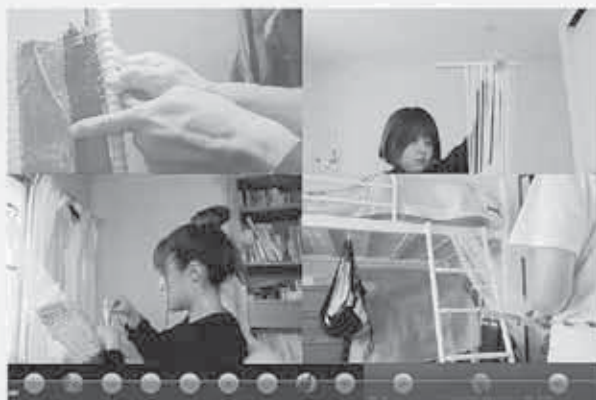


4. 織る





手織物制作キット「シエントスⅣ」



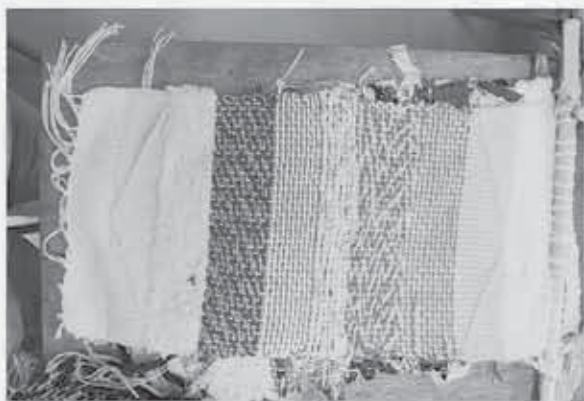
Teams 上での授業風景



デモ動画撮影風景



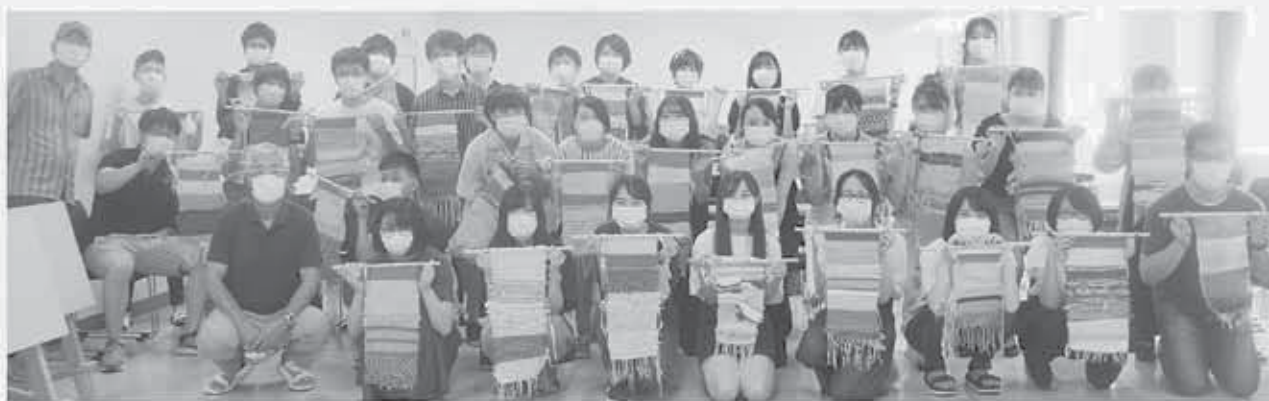
制作風景



作品例 1



作品例 2



集合写真